

# 箕輪遺跡

## 調査第IV集

昭和 58 年

箕輪町教育委員会

# 箕輪遺跡

調査第IV集

昭和58年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 横口彦雄

箕輪遺跡は弥生時代から近世に至る、大農耕遺跡として、広く注目されている所であり、既に三次にわたり発掘調査を進め、その調査報告をした。

今回は箕輪町開発公社による、宅地造成事業のための調査であり、調査の中心を現在僅かにその一部分を残す、町指定城跡の田中城跡におく第4次調査である。

天文14年（1545）藤沢氏は武田の軍勢に福与城を開け、京都に逃れ、後再びこの地に戻った。天正10年（1582）田中城を築いたといわれたその田中城跡であるため、発掘の期待は大きかった。

調査は丸山敏一郎氏を団長とする調査団、作業協力者の態勢を作って臨んだ。然し残念ながら期待に反した結果となった。細部は章を追って明らかにする。

広大で貴重な箕輪遺跡、緊急発掘調査の必要があれば、どのような結果を得ようとも、今後これには積極的に対応したい。

## 凡 例

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町990番地他に所在する 箕輪遺跡第4集の調査報告書である。
2. 本調査は、箕輪町開発公社の委託を受けて箕輪町遺跡調査会が実施した。  
発掘調査は昭和58年7月26日より8月2日まで実施し、引き続き整理作業を行なった。
3. 本書に掲載した写真は柴登巳夫の撮影したものを使用した。
4. 本書の執筆は福沢幸一、久保寿一郎、樋口彦雄、柴登巳夫が行なった。
5. 本書の編集は発掘調査団が行なった。

# 本 文 目 次

題 字	教育長 横口 彦雄
序	II
凡 例	II
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第 I 章 遺跡の立地 .....	1
第 1 節 位 置 .....	1
第 2 節 自然環境 .....	2
第 3 節 歴史的環境 .....	3
第 II 章 発掘調査の経過 .....	6
第 1 節 発掘調査に至るまで .....	6
第 2 節 調査の概要 .....	6
第 3 節 発掘調査日誌 .....	8
第 4 節 発掘調査の状況 .....	9
(1) トレンチ設定 .....	9
(2) 地層状況 .....	10
(3) 残存土量状況 .....	11
第 III 章 まとめ .....	12

## 挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1
第2図 遺跡周辺の地形.....	2
第3図 周辺遺跡分布図.....	5
第4図 トレンチ設定図.....	9
第5図 地層断面図.....	10
第6図 土壌実測図.....	11

## 図 版 目 次

図版I 調査区近景
図版II トレンチ掘削状況
図版III 調査風景
図版IV 土壌状況

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置

笹輪遺跡は長野県上伊那郡伊那市及び南伊那村にまたがり、天竜川右岸沖積地に位置する大遺跡である。今回の発掘調査は南伊那村境の大字三日町990番地附近を対象とした。ここには、天正10年（1583年）に森沢次郎頼綱によって築かれた田中城址が残った位置もある。城址は土塁の一部を留めるだけであるが一帯は城に関する地名が多数残っている。



第1図 位 置 図

## 第2節 自然環境

箕輪遺跡は箕輪町のはば中央を南に流れる天竜川の西岸から、国道153号線に至る間と、東よりこの天竜川に流入する帶無川より南の100ヘクタールに及ぶ水田地帯である。

西は段丘上に天竜礫層が山麓までゆるやかな傾斜で続きここには耕地整理をしたいわゆる西天竜水田地帯が広がっている。天竜川の東岸は少しの水田をはさんで花崗岩質の山麓となる。ここはすべて天竜川による沖積層である。

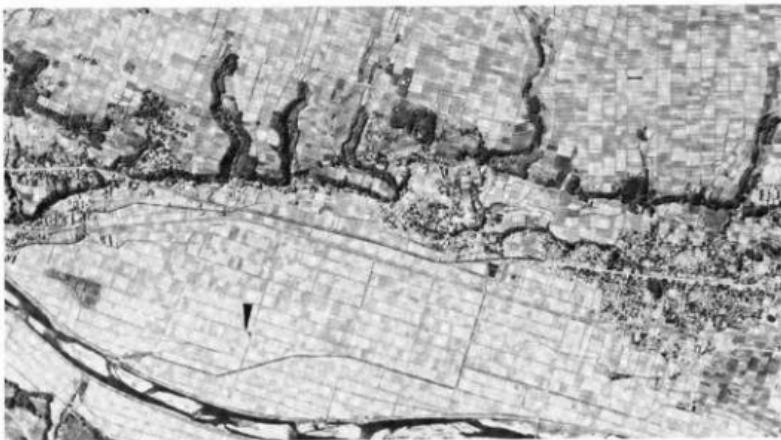
箕輪町では昭和42年より国土調査法に基づく土地分類調査を行った。この主目的は、国土の実態を把握して土地利用の可能性を明らかにするためであったが、それによれば殆んどが砂質土壌で下層には砂礫が多いが、天竜川の河川盤であったと言われたところには、葦の根等が、圧縮された状態、又は泥炭に似た状態で埋没されていることを発見している。なを町内全域を4項にまとめてあるが、箕輪遺跡の属する天竜統については、天竜川の氾濫により運搬された土壤で有機質を含んだ細礫が20cm~40cm堆積しているとの報告がある。なおそれを、

第一層	0cm~16cm	黒褐色の砂壤土で膜状の班鉄に比較的富む	密度中	ねばり中
第二層	16cm~20cm	黒黄褐色の埴土で沈積した班鉄を含む	密度密	ねばり中
第三層	20cm~47cm	一層と同じ		
第四層	47cm以下	黒褐色の埴土で班鉄はなし	密度密	ねばり弱

のようにまとめてある。

これは農業振興を目的とした植物に関する土壌調査で、埋蔵文化財の在る深さにまでは達しない。いわば表土に関する報告であるが、箕輪遺跡の現状の自然環境を示すものとして参考になる。

(樋口 康雄)



第3図 遺跡周辺の地形

### 第3節 歴史的環境

伊那谷の北部に位置する箕輪町は、中央部を天竜川が貫通している。この天竜川に流入する支流により川は大小の曲線を描きながら流下している。本遺跡は天竜川と平行して走る飯田線の木下駅一帯から南箕輪村北殿に亘る総面積100ヘクタール余に及ぶ広範囲の地域である。一帯は木下の北を東流する帶無川がある時期に激しく活動して天竜川を東に押したため、段丘下から天竜川との間に現在のような平らな地形が形成されたものと考える。しかも天竜川の形成した右岸の段丘と現流路の中間に横たわる本遺跡は、帶無川とかつて西方から東流した小河川によって扇状地的地形を形成しているため、一般に段丘から水辺にかけて緩傾斜をなし、沼地的土層の中に砂礫層を包含している。このことは遺跡一帯の地層地質をかなり複雑にし、このような自然環境はこの地域に生活の基礎をもった人々に大きく影響を与えたことであろう。又昭和27年前後に実施された土地改良事業以前は、いたるところに湧水池や沼地が有在し、この地域が低湿性であったことを物語っている。なお段丘の付近は標高700m、遺跡西端付近は670mの等高線上にあり、天竜川の沿辺はさらにこれより数メートル低位にある。したがってこの地域一帯がいつ頃から人々の生活可能な場所となっていたかということは、発見された遺物によつて決定されねばならない問題であるとともに、背後の高い段丘地帯と天竜川を前面に控えたこの地帯は、湿性の多い地域であったが、古代人の生活にとっては、その食生活をある程度光らうる条件を備えていたものと解さなくてはならない。ことに水田耕作を生業とする段階に至つては、湿性の多いことがかえって良好な生活範囲となったものといわざるをえない。多くの低湿地遺跡がほとんど単純な一時期の生活に終っているのに対して本遺跡は長期間にわたって遺物を残していることは、その生活期間の永続性を思わせ、その条件にかなっていたことを物語っている。

町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4地区に分けることができる。

第一群 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡

第二群 天竜川西岸の段丘上に並ぶ遺跡

第三群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡

第四群 低位段丘(沖積段丘)の遺跡

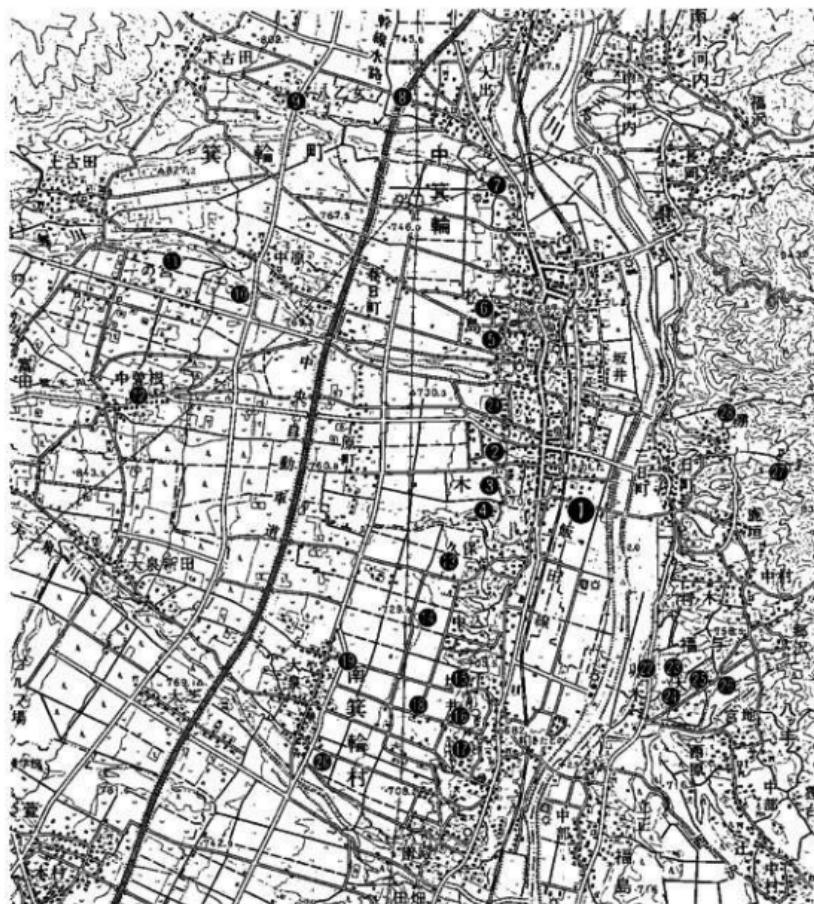
箕輪遺跡は第四群の遺跡であり、四群そのものが、箕輪遺跡である。前述のごとくこの箕輪遺跡が、第二、第三群の東西段丘上の遺跡と深い関係を持ちながら経過したことは当然考えなければならない。段丘上に居住した人々が低湿地を何かの利用で生活範囲の一部に加えたことを意味するのである。まず第二群における上の林、北城、南城遺跡に見る縄文時代中期から続く遺跡は箕輪遺跡出土の中期、晚期土器類と関係を持つものと考えられ、特に弥生時代に入つてからの低湿地帯を利用した集落は、西側段丘上に位置していたことと思われる。箕輪遺跡を眼下に見る段丘上には、上の林、北城、南城、猿樂と弥生時代の大きな集落跡が調査されてい

る。南箕輪村に入っても同じく天伯遺跡など段丘上に跡切れることなく並んでいる。それらの遺跡のほとんどが弥生時代から引き続いて古墳、奈良、平安時代の集落を残し、段丘上突端部が居住性に富んでいたことを物語っている。これは永く低湿地帯を利用した生活が続いたことの一つの証左としても考えられる。

天竜西側段丘に位置する遺跡として、その壮大な規模を示す松島王墓古墳がある。6世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何んであったのだろうか。そうする時、箕輪遺跡一帯から生産される大量の米は、経済的裏付けの最たるものと思うのである。言い換えれば、王墓古墳出現の最も大きな要素とも考えられる。又、ここは中世に至っても多くの係わりをもつてゐる。その一つとして、藤沢頼親が建武年間に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天險もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源としての理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考えがそこにあったものと推測される。武田信玄が天文十二年に下伊那出兵の際御射山社に土地を寄進したのはこの地の住民を懐柔してその産米を得る理由からであったろうし、天正十一年木曾義昌が三日町、福与の両神社に土地を寄進したのも武田氏同様の考え方であったと思われる。

箕輪遺跡の東端、天竜川の西岸地域には、慶長十七年(1612)に小笠原氏が木下の上の段付近に陣屋を移すまでは三日町に部落があり、市場があったと伝えられる。現在の字町田城安寺、高坂田、古町等の地名を残しているところである。慶長十七年夏、天竜川大洪水により、三日町村は大半流失し、住民は現在の地に引き移り、村跡はほとんど水田と化した。この遺跡内の水田耕作者は三日町、木下、久保、塩ノ井、殿村の人々によってなされている。これ等箕輪遺跡を取り巻く歴史環境は、箕輪の歴史を語る時必ず係わりをもち、これを除いては考えることはできない。箕輪遺跡を中心とした一連の歴史こそ箕輪史の集約であろう。

(柴 登巳夫)



- ① 笠輪遺跡群
- ② 北城
- ③ 南城
- ④ 猿樂
- ⑤ 藤山
- ⑥ 中山
- ⑦ 王墓古墳
- ⑧ 中道
- ⑨ 五輪
- ⑩ 並木下
- ⑪ 一の宮
- ⑫ 中善根北
- ⑬ 向垣外
- ⑭ 山の神
- ⑮ 天伯
- ⑯ 上人塚
- ⑰ 墁外
- ⑱ 内城
- ⑲ 大泉
- ㉐ 宮の上
- ㉑ 上の林
- ㉒ 北垣外
- ㉓ 黒津原
- ㉔ 矢田
- ㉕ 上金
- ㉖ 大原
- ㉗ 澄心寺下
- ㉘ 御射山

第4図 周辺遺跡分布図

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

本地区は、天竜川の沖積面に所在し、当町から南箕輪村にかかる広大な水田地帯である。昭和26年より行われた土地改良事業により区画が整然としている。本地区一帯が一大遺跡地帯として注目されるようになったのは、この地に土地改良事業が行われた際、偶発的に各時代の遺物が多量に出土したことによる。特に本県には数少ない低湿地遺跡としてクローズアップされ重要な遺跡として認められるようになった。

国道バイパス工事に伴ない昭和55年度より調査を開始し昨年度までに3次にわたる発掘調査を実施した。本年度は当町開発公社が宅地造成事業を計画したため、その工事に先立ち一帯を発掘調査する運びとなった。昭和57年9月に南箕輪村教育委員会において、今回の調査区の地続きにおいて調査が実施されているため、土中の状況はおよそ予想されていたが、一面天竜川の氾濫による礫層のみであった。

### 第2節 調査の概要

- 遺跡名 箕輪遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字三日町990番地他
- 発掘期間 昭和58年7月26日～8月2日
- 調査委託者 箕輪町土地開発公社
- 調査受託者 箕輪町遺跡調査会
- 調査会・調査団の構成は下記の通りである。

#### 箕輪町遺跡調査会

会長	市川脩三	箕輪町町誌編纂専門委員
理事	荻原貞利	箕輪町教育委員会社会教育指導員
"	堀口 泉	"
"	大槻 利	箕輪町町誌編纂専門委員
監事	小林重男	箕輪町郷土博物館専門委員
"	堀口貞幸	箕輪町町誌編纂専門委員

調査団 団長 丸山歎一郎 日本考古学協会会員（伊那弥生ヶ丘高等学校教諭）  
 担当者 柴 登巳夫 美輪町郷土博物館学芸員  
 調査員 福沢 幸一 長野県考古学会々員  
 " 久保寿一郎 九州大学学生

作業協力者

山内志賀子・中村哲二・唐沢清人・唐沢忠賢・後藤武雄・小田切文雄・小林幸弘  
 白鳥宏幸・中村秀樹（順不同 敬称略）

参与 馬場 研一 美輪町教育委員会教育委員長  
 戸田 宗十 " 教育委員長職務代理  
 桑沢 良平 美輪町教育委員会教育委員  
 那須 与一 "  
 萩原 貞利 美輪町文化財保護委員会委員長  
 有賀 愛視 " 副委員長  
 小林 伸陽 美輪町文化財保護審議委員  
 市川 翁三 "  
 矢沢 喬治 "  
 山口 豊春 "  
 堀口 貞幸 "  
 小林 健男 "  
 小林正之進 "  
 唐沢 忠孝 "

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

横口 彦雄 美輪町教育委員会教育長  
 北川 文雄 " 社会教育課長  
 太田 文陳 " 社会教育係長  
 柴 登巳夫 美輪町郷土博物館学芸員  
 竹入 洋子 "

### 第3節 発掘調査日誌

○7月25日 (月) くもり、雨

発掘調査の準備、資材運搬、テント設営、トレンチ設定。



○7月26日 (火) 晴

調査開始。

調査区北西部に残る土壘の規模確認のため草刈りを行う。トレンチ1、2を掘削。トレンチ1では耕土が20cmで、その下は礫層が現われ、80cm以上続く。トレンチ2では耕土が20cmで、砂を含む黒土層が現われ、その下が砂礫層となる。



○7月27日 (水) くもり、時々雨

雨天により、午前中のみ作業。

土壘の草刈り終了。

○7月28日 (木) 晴

土壘の平面実測開始。

トレンチ2より木片の小さなもの出土。

トレンチ3を掘削、耕作土の下は礫層。

トレンチ5を掘削、水路の東側は耕土下は砂礫層で、西側は耕土—砂礫層—砂層となっている。



○7月29日 (金) 晴

土壘の平面実測終了。

トレンチ2における層位確認及び実測のため断面を整備。トレンチ4掘削。トレンチ

1の砂礫層が南約8mの地点で消える。

トレンチ5掘削。西側道路より35mの地点で砂礫層と砂質土層の境が認められる。

○8月2日 (火) 晴

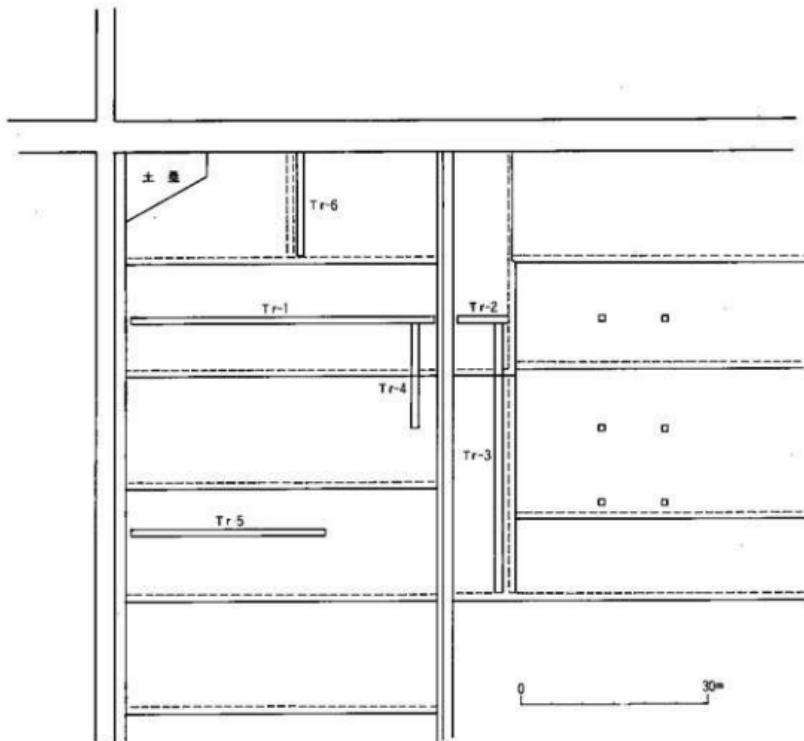
土壘の断面実測。

トレンチ2の北壁の土層実測。トレンチ6掘削。全体測量、作業終了。

## 第4節

### 1. トレンチ設定

調査対象面積がかなり広いため地層状況をまず確認する必要があった。今回の調査地点よりすぐ南側に昨年（1982年9月）南箕輪村教育委員会が、調査を実施している。その時の状況を見ていたため、機械を使用してのトレンチによる方法を用いた。地層状況や土壌の予想位置などを考えながら、結果的には第4図に示すようなトレンチ設定を実施した。トレンチ1は東西に巾2m長さ50m深さ平均70cm程度に設定した。トレンチ2は7mの長さで深さ約2mと深い。計6本のトレンチを設定した。この他にも天竜川寄りの水田の中に何ヶ所かのグリッドを設け、地層の確認を実施した。トレンチ6は残存土壌のすぐ東に設け、土壌の地層状況を判断する目的で設定した。結果的には他の状況と全く変化なく耕土下は礫層のみであった。

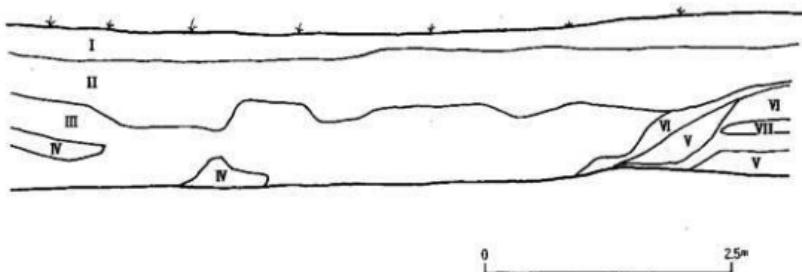


第4図 トレンチ設定図

## 2. 地層状況

6ヶ所設けたトレンチにおいて、第2トレンチの部分を除いてほとんど同一の地層状況であった。第一層は水田の耕土が15~20cmあり、その下は礫層になっている。礫層がどのくらい続くものか知るため、トレンチ1の西端を3m近く深耕したが全く同一の礫層であった。

トレンチ2において一部他と異なった地層状況が現われたので、第5図にその断面図を示した。第II、III層の基本層序においては黒土が主で、中に径5~15cmの大きさの礫が混入している。この位置は第1トレンチ設定面より一段低くなった土手状の部分だが、この一部だけ礫層がないことが不思議である。この部分よりさらに一段低い東側においては、礫層が深くまで続いている。昭和28年前後に実施された土地改良工事以前はこの附近まで天竜川が流れているそうである。



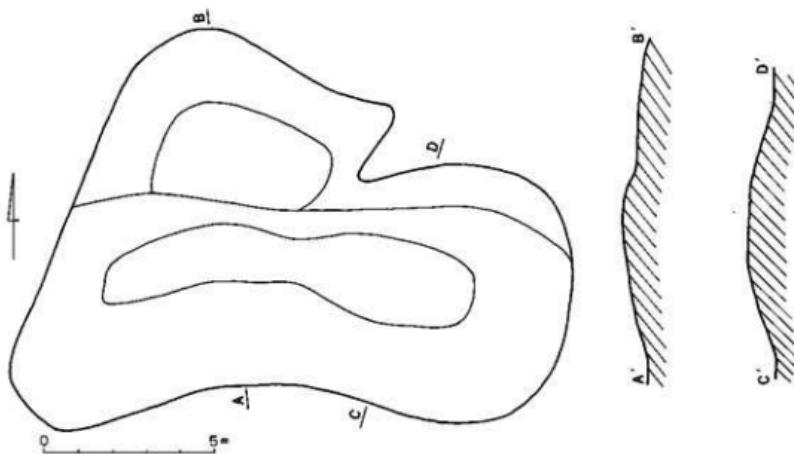
第5図 地層断面図

### 層序説明

- |     |                   |
|-----|-------------------|
| 第Ⅰ層 | 耕作土               |
| 第Ⅱ層 | 礫混じりの黒土（しまった土である） |
| 第Ⅲ層 | 粘質黒土（若干礫混じり）      |
| 第Ⅳ層 | 暗灰色砂層（やや粘質）       |
| 第Ⅴ層 | 灰色砂層（やや荒い）        |
| 第Ⅵ層 | 粘質砂層              |
| 第Ⅶ層 | 〃 VI層よりもキメが細かい    |

### 3. 残存土壘状況

田中城は箕輪町の南端（南箕輪村境）の天竜川沿いの水田の中に、一部分の土壘を残すだけである。第6図に示したものはその残存土壘の状況図である。現状は、頂部に『田中城址』の石碑と、説明板がある他は一面草木で覆われていた。残った土壘の規模は東西約16m、南北約6m、高さ1mである。内側に湾曲しており、ドーナツ状に一周していたといわれる土壘の状況を推測することができる。昭和29年前後に実施された土地改良事業まではこの土壘がかなり残っており、（現在の数倍くらい）その規模を知ることができたといわれる。明治12年の報告によると、土壘内の面積が2反4畝21歩、土壘の長さ126間3尺（約250m）の石垣がめぐらされていたと記されている。土壘の内外に周溝が認められるかを主眼にトレンチを設定し、調査したが、土層の変化は全く確認できなかった。現状では高さ1m程度で、巾も6m内外であるが、積まれた石垣が両側にくずれかなり低くなったものと考える。土壘の表面は径5~20cmほどの石で覆われているが、内部は土と礫の混入した状況で、単に土や礫を盛るだけで、周溝を伴わないものであったと思われる。土壘及び付近からの遺物の出土は全く認められなかった。



第6図 土壘実測図

### 第III章 ま　と　め

箕輪遺跡に発掘調査が実施されて今回が第4次になる、昭和56、57年度は県道箕輪美篠線の改良に伴う調査であった。これについてはそれぞれ調査第II、III集に報告したとおりである。木製品、陶磁器類など多数の出土遺物が発見されている。

今回の発掘調査は町開発公社による宅地造成事業に伴う事前調査であった。調査対象面積が広いため、調査区内に6本のトレンチと数ヶ所のグリッドを設定して、造構及び土層確認のため掘削を行なった。結果は本文中に示す通りであるが、天竜川の氾濫が予想以上に大規模であり、歴史的遺構、遺物を全く留めることなくすべてを礫が覆いつくしてしまっている。

調査区の一角にわずかに残った土壘を掘り所として、土壘の規模を確認するため調査の主眼をそれに切り換えたが、これも何の手掛かりも得られなかった。内部の土層状況については、昨年の南箕輪村教育委員による調査結果により、ある程度は予測したが、これほど礫層が広く又深くまで堆積しているものとは思いもよらなかった。調査全体を通して、遺構・遺物等の発見は無かったため、調査のまとめもごく簡単なものとなった。

一週間余りではありましたが厳しい暑さの中で調査に協力下さいました方々に厚くお礼を申あげます。

# 図 版

図版  
1



調査区近景



トレンチ掘削状況

図版  
3



調査風景



土 堆 状 況

箕輪遺跡  
第IV集

長野県上伊那郡箕輪町  
緊急発掘調査報告書

昭和58年10月1日 印刷  
昭和58年10月1日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市(株)小松総合印刷所